

<特集補遺：まえがき>

特集補遺：まえがき

Special Issue: Foreword

風間 伸次郎
Shinjiro Kazama

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

1. これまでの経緯と今回(25号)での方針について

2009年に『語学研究所論集』(以下『語研論集』)の「特集」が開始され、一昨年度刊行の23号まで、10のテーマに関する特集が行われてきた。その内容を振り返ると、14号：受動表現、15号：アスペクト、16号：モダリティ、17号：ヴォイスとその周辺、18号：所有・存在表現、19号：他動性、20号：連用修飾的複文、21号：情報構造と名詞述語文、22号：情報標示の諸要素、23号：否定、形容詞と連体修飾複文、となっている。まだとりあげていない文法カテゴリーも多くあるが、性や数、名詞類別などの名詞の文法カテゴリーについては、これを持たない言語も多いので、通言語的なデータ収集には適していないと思われる。10年目(24号)と11年目(25号=今号)では、落穂拾いではないが、なるべくそれまで取り上げていなかったものを残さず取り上げることを目指した。すなわち今号でも引き続き、これまでの特集でデータの得られなかった言語の補遺を集め、データ全体を揃えることを目指すこととなった。

2. 今回の時点でのデータの収集状況について

幸い、申請した競争的経費も認められ、今回多くの補遺のデータを集めることができた。ここではまず本学にある28専攻語のうち、日本語を除く27専攻語について、今号ではどのような言語の補遺のデータがどこまで集まったのか、という点について整理してみよう。なお前号では27専攻語と書いたが、近年ウズベク語が加わり、外語大のいわゆる専攻語は現在28言語となっている。

フランス語、ポルトガル語、中国語、モンゴル語、マレーシア語、ラオ語、カンボジア語、ベトナム語、ビルマ語、ペルシア語、アラビア語、トルコ語、についてはすでに全データが揃っていた。今号ではさらに朝鮮語とウルドゥー語に最後の1回分が加わり、全回分のデータが揃った。英語についても今号で全回分のデータが得られた。したがって全回分のデータが揃っているのは合計15言語ということになる。

今号では上述の言語の他に、ドイツ語の1回分(残りは1回分)、ポーランド語の1回分(残りは4回分)、チェコ語の1回分(残りは4回分)、インドネシア語の3回分(残りは2回分)、タイ語の1回分(残りは4回分)、タガログ語の4回分(残りは6回分)が加わった。特にゼロだったタガログ語のデータが加わったことの意義は大きい。貴重なデータの収集に努力して下さった先生方、院生の方々、手配や依頼に奔走して下さった『語研論集』編集幹事の先生方、査読をしてくださった先生方、補佐の深尾さん、謝金の円滑な運用に配慮して下さった事務の方々などの御尽力なしには全く不可能であったことだろう。さまざまな方々の御協力に深く感謝申し上げたい。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

今回新しいデータは得られなかったが、イタリア語で残るのは15-18, 21の5つ、スペイン語は16, 22の2つ、ロシア語は17, 19, 21の3つ、ウズベク語は18, 20, 21, 23である。

一方、ベンガル語に関しては現時点ではなお1回分もデータがない。ヒンディー語も20に「ウルドゥー語・ヒンディー語」としてのデータがあるのみである。日本国内におけるこの地域の言語研究の発展、言語研究者の（育成による）増加を切に祈りたい。

3. 今回収集されたデータにおける意義

3.1. 英語のデータ：英語圏の言語の調査／類型論研究における意義

上記のように、今号では英語の全回分のデータが得られた。北米、アフリカ東部、オーストラリアなどには、十分に調査されていないたくさんの言語が存在する。英語のデータがあれば、今後上記をはじめとする地域の国々での少数言語の文法調査においてこれを「調査票」として使用することもできる。北米やオーストラリアの先住民の言語の大部分は消滅の危機に瀕しており、そのデータの収集は急務である。

3.2. ガイ語、ダグール語、フィジー語、パピアメント語のデータの意義と今後の課題

次に、本学の27専攻語以外の言語で今回データの得られた言語について簡単に触れておく。

まず特筆すべきはアフリカのコエ語族のガイ語に関して全回分のデータが揃ったことである。これは本学に中川裕先生という専門家がいらっしゃることによるもので、世界的にも貴重なデータといえるだろう。今後はさらにアフリカの3語族（アフロ・アジア語族（ここではアラビア語を除いて考えている）、ナイロ・サハラ語族、ニジェール・コンゴ語族）の言語のそれぞれから1言語ずつでもデータが集められないだろうかと考えている。

ダグール語はモンゴル語族の言語である。アルタイ諸言語のうちチュルク語族とツングース語族については、本学に専門とする研究者や院生がいるためにそれぞれに数言語に亘るデータがある。他方、モンゴル語族の言語のデータはもっぱらハルハ・モンゴル語のものばかりである（これはモンゴル諸語研究一般における課題であるとも言える）。河西回廊のいわゆるシロンゴル・モンゴル諸語に関するデータとなるときわめて乏しい。このような言語の語研「特集」アンケートによるデータの収集もアルタイ諸言語の全体像を明らかにしていくための重要な課題である。アルタイ諸言語は朝鮮語と共に日本語とよく似たタイプの言語であり、これらの言語の解明は日本語の類型的特性の解明につながっている。

フィジー語はオーストロネシア語族メラネシア語派の言語である。オーストロネシア語族は実に1,200ともいわれる言語からなる巨大語族である。オーストロネシア語族に関して今後、台湾先住民の言語、ポリネシア語派の言語、ミクロネシアの言語、ニューギニアおよびその近隣の言語の言語などについて対照できる言語データが収集されれば、現在すでにあるタガログ語、マレーシア語、インドネシア語のデータもさらに有用なものとなるだろう。

パピアメント語は、カリブ海のいわゆるABC諸島で話されるクリオール言語である。ピジン・クリオールの言語の研究は言語の起源や原初的形態の研究にとって極めて重要とされているが、その研究は遅れている。メジャーな言語に混じって今回初めてクリオール言語のデータが加わったことの意義はきわめて大きい。

個別言語の研究や教育、言語類型論の研究分野などにおいても今後上記の「特集」のデータをもとにさらに活発な議論が展開されることを望みたい。

4. 全体的な今後の課題

系統や地域に偏らないデータが類型論的な研究にとってきわめて重要であることはいうまでもない。したがってこの語研「特集」のデータには、（毎号書いているが）新大陸の言語やオーストラリア先住民の言語、

カフカースの言語などのデータが今なお皆無であり、これらの言語のデータの収集がもっとも重要な課題である。

日本国内にも中南米のインディオの言語の話者はある程度いらっしゃるに違いない。したがってぜひあと2回分のスペイン語のデータを揃え、ポルトガル語のデータとともに今後中南米の諸言語を調査するための貴重な調査票として有効に活用していくことが必要である。

27言語の10年分の特集であるので、本学の専攻語に限った限りでも、延べ270あることになるが、残っているのはそのうちの54であり、これは全体の20%に当たる。今回の補遺では22の新しいデータが得られたので、次の26号、もしくは遅くとも27号で270の全データが揃うことが期待される。

一方で、この『語研論集』の特集で収集されたデータを、言語と項目から自由に検索するシステムも作成中である。これは語研のHPに現在「語研論集データベース」として公開されている。ただし現在公開されているデータは、言語数に関してもテーマに関してもなお一部にとどまっている。グロスも不統一な状態である。全データ収集の後、その全データがこのデータベースに組み込まれる形となれば、文法の対照研究および類型的な研究にとって十全な貢献をなすものとなることだろう。

記述言語学や対照言語学、言語類型論の研究にとって有益なものとなるだろうという考えから、試行錯誤しつつ、このような「特集」データの収集を続けている。ただ我々が気付いていない問題点や、目指すべきより良い形、収集すべき別の重要なデータなどがあるという可能性は十分に考えられる。読者からの御教示、御批判御叱正等をいただければ幸いである。特にこの「特集」ならびに「語研論集データベース」の収集・作成・活用等に関して、建設的でより良い方策やアイデアをぜひお聞かせいただきたいと考えていることをお伝えして、筆を置くこととする。